

初八

## 〔南方録三〕多客少客心用之事

小座敷の會客五人に過べからず、凡は二三人を吉と云、露地入坐入配合を見る杯の際入に、火相心得ざればひが事多し、二三人迄は大方程拍子能もの也、夫故主客未熟なれば、遲速のべち、めを知らず、火相湯相惡敷成也、五人にも成と、客のたちふるまひ手間入れば、火相散々に惡敷成也、凡客多き時は、主も早々迎ひ入れ、よろづ客ぶりもはかり行し様子心得が能也、夜會の時燭を乞て床臺目等見る事も、灯のあかりにて見ゆる程ならば、燭を乞て再見無用也、配合に寄、一ツ物杯の時は、たとひ大勢たりとも燭を乞て疾と見るべし、先初に座に入たる時、灯のあかりはきとならば、床臺目を見ずに直に座に付、主出て後、燭を乞見るもよし、やすき様にて主客の功不功此所也、能々煇煉有べし。

〔客之次第〕一にじりあがりの内へ入さまに、兩わき次に上を見て、扱床を見やりて入事よきなり、亭主により、めづらしく色々の手とりなる事をする人あり、にじりのあがりの上に花などをいけて、水をあびせたる人もありし也、總じてにじり上りと云て、頭と手と入て、やがて片膝をおり、よこにうつぶしにじり入事なり、たゞうつぶしてはい入にあれば、ひざを入る時に、こしあがるに依て、くゞりにてせなかをうつ物なり、殊にうつぶしては、前さき左右見えすして、かならずまそこなひ致す事なり、

一ていしゆ出合一禮して、炭の時釜を上、ろ中へ火箸を入候時、分客もさしよつて、はつる迄よく見物するなり、炭に氣を付る事專なり、

〔細川茶湯之書下〕一刀掛に脇指上て置べし、そろくとしづかにをく也、

一先次第なれども、人によりてくゞりの前にて、諸の人へ一禮申入べし、

一せきだを石の上にくにぬぎそろへ、手をくゞりにかけ、そろりとしづかに戸をあけて内を